

教育学研究科入学者の思いから探る

佐藤 智彦

1. はじめに

本学大学院教育学研究科（以下、大学院）に看護専門職通信教育（通称：看護教育研究コース）が開設されて2017年度で3年目となった。初年度入学生7名は2年間の大学院生活を修了し、現在は20数名の大学院生が様々な研究を進めている。本コースの主目的は、慢性的な看護師不足への長期的な対応策として、次世代の看護師の育成に携わる人材を増やすことである。本稿では、これまでの大学院生と筆者とのやり取りから、「看護教育と共生」について考えていくことにしたい。

2. 通信制のハンディキャップを乗り越えるための工夫

通信制大学院の学生の大きな特徴は、そのほとんどが働きながら大学院で学んでいることである。修士論文のための研究を2年かけて学生が進めていく上で、通学制大学院のように毎日指導教員と学生が顔を合わせられないことは、「通信制のハンディキャップ」となってしまふことがある。それを少しでも克服するために筆者が考えたことは、入学生に「自身のこれまでを振り返りながら大学院でやりたいこと」を文章にまとめてもらうことであった。この筆者からの「入学時のレポート課題」に、開講当初から修了生と在学生計10名（2017年10月現在）が応えてくれた。各学生の文章はすべてオンラインで閲覧することができる¹⁾⁻¹⁰⁾（各文章は大学院HPにリンクあり）。入学後にその学生と筆者が直接会って話したことやメールでのやりとりを踏まえて、学生からの初稿に筆者が加筆・修正して完成したものである。本稿では、その10名の文章を掘り下げていくことにする。

3. 10名の学生の属性と研究テーマ

看護教育研究コースの学生は、医療現場で活躍する看護師（助産師を含む）グループと未来の看護師に向けて学生の基礎教育を担う看護教員グループの二つに大きく分けられる。前者にはこれから看護教員あるいは病院等の管理職としてのステップアップを目指して入学する者が多いのに対して、後者には教員としてのステップアップを目指して入学する者が多い。

働きながら学ぶことを選択してきた学生の「決意」をしっかりと表現するために、各学生の文章は、

- ①現在の立場
- ②大学院入学までのライフヒストリー（ターニングポイントがわかるように）
- ③それまで医療現場や看護師等学校養成所（大学、短期大学、専門学校）でやってきたこと
- ④これから大学院で取り組んでいきたいこと

から構成されている¹⁾⁻¹⁰⁾。

本稿で取り上げる文章を書いた10名（A～J：表1）の学生の内訳は、看護師（助産師を含む）5名、看護教員5名である。各学生が取り組んでいる研究テーマを表1に示した。それぞれの職場での経験を踏まえて各学生の特徴を盛り込んだ研究テーマとなっている。

次にこの10名の学生の属性を表2に示した。10名の各パラメータの平均および内訳を見ると、入学時年齢41.0歳、10名中9名が女性であり、9名が専門学校卒（看護に関する最終学歴）であった。看護師養成施設卒業後18.8年が経過しており、13.1年の看護師歴があった。また、これまでに4.0回の職場異動があり、2.5年の勤務中断があった。NSグループとTRグループを比較すると、通信制大学を卒業している者がTRグループで有意に多かった。（当然のことながらNSグループの5名に看護教員歴はなかった。）

表1 10名の研究テーマ

看護師(NS: A～E 5名)	看護教員(TR: F～J 5名)
A. シミュレーションによる院内教育 ¹⁾	F. 離職看護師のセカンドキャリア ⁶⁾
B. 助産師による双子への授乳指導 ²⁾	G. 看護学生への倫理教育 ⁷⁾
C. 精神看護領域における倫理教育 ³⁾	H. 臨地実習(統合実習)の改善 ⁸⁾
D. 小規模施設での新人訪問看護師への指導方法 ⁴⁾	I. ロールプレイによる終末期看護演習 ⁹⁾
E. 看護師のセルフマネジメント ⁵⁾	J. 小児看護領域での絵本の読み聞かせ ¹⁰⁾

4. 10名の入学時の文章からその「決意」を探る

この10名の大学院入学時の文章を概観するために、①NS 5名分の文章（全18,375文字）と②TR 5名分の文章（全22,136文字）を比較した。テキストマイニング（User Local テキストマイニングツール <https://textmining.userlocal.jp> を使用）から、①②に共通する頻出語を表3に示した。両グループ5名ずつの文章をまとめて比較しているため（以下、表3～6、図1に共通）、1名当たりの文章での各語の登場回数はその1/5になることを付記しておく。

表2 10名の基本属性 (NS vs TR : * F 値、** χ^2 値)

	Total (n=10)	NS (n=5)	TR (n=5)	NS vs TR	p 値
年齢(歳)	42.2	39.8	44.6	1.047*	0.33
入学時年齢(歳)	41.0	38.2	43.8	1.308*	0.29
性別(男/女)	1/9	1/4	0/5	1.498**	0.22
子ども(人)	1.2	1.0	1.4	0.211*	0.66
看護: 専門卒/大卒	9/1	4/1	5/0	1.498**	0.22
卒業大学 (なし/通信/通学)	5/4/1	4/0/1	1/4/0	8.859**	0.01
看護師養成施設卒業後 経過年数(年)	18.8	15.6	22.0	1.470*	0.26
看護師歴(年)	13.1	13.0	13.2	0.002*	0.97
勤務中断年数(回)	2.5	2.4	2.6	0.005*	0.95
勤務中断回数(回)	0.7	0.8	0.6	0.050*	0.83
看護教員歴(年)	3.0	0.0	6.0	9.73*	0.01
通算異動回数(回)	4.0	4.0	4.0	0.000*	1.00

表3 NS 5名と TR 5名の文章に共通する頻出語 (カッコ内は NS/TR での登場回数)

看護(106/119)	看護師(87/83)	できる(49/50)	考える(36/57)	思う(38/49)
患者(31/51)	感じる(30/37)	いく(32/32)	教育(22/37)	経験(21/35)
病院(26/28)	持つ(19/32)	仕事(13/23)	大学院(18/17)	指導(15/18)
勤務(15/17)	研究(19/11)	くれる(14/14)	進学(10/17)	多い(17/10)
目指す(9/17)	見る(11/13)	日々(12/12)	新人(13/11)	生活(15/9)
医療(11/12)	卒業(10/13)	知る(12/9)	理解(8/12)	取得(12/7)

10名の文章¹⁾⁻¹⁰⁾を読む前に、この共通する言葉の一覧からそれぞれの文章内容を想像してもらいたい。各学生が「看護」に対しての強い思い入れがあることがわかる。そして、彼らの背景には、これまでの看護師としてのキャリアだけでは新人看護師や学生の指導が難しいという経験があり、彼らの大学院進学のも動機につながっているのである。

次に、NSグループによくみられる言葉を表4に示した。NSグループでは、知識や技術など看護業務に関する言葉がTRグループよりも多く登場していることがわかる。

続いて、TRグループによくみられる言葉を表5に示した。臨床現場ではなく学校でのエピソードを反映して、学生、学ぶ、学び、実習などの言葉が多く見られた。

表4 NSに多い頻出語（カッコ内はNS/TRでの登場回数）

働く (22/3)	行う (22/11)	必要 (18/10)	知識 (20/7)	介護 (15/6)
伝える (12/7)	技術 (14/4)	就職 (12/6)	様々 (11/6)	職場 (12/4)
年間 (11/5)	離職 (10/5)	重要 (13/2)	やりがい (12/2)	地域 (11/2)
取り組む (9/4)	高い (10/2)	理由 (8/4)	得る (8/4)	管理 (10/1)
学修 (9/3)	業務 (7/3)	訪問看護師 (9/1)	研修 (7/2)	進める (6/3)

表5 TRに多い頻出語（カッコ内はNS/TRでの登場回数）

学生 (12/66)	教員 (12/42)	学ぶ (12/38)	看護学生 (5/25)	気持ち (6/22)
関わる (5/23)	実習 (5/21)	自身 (7/19)	強い (9/17)	保健師 (8/16)
大学 (7/15)	現場 (7/15)	子ども (2/20)	倫理 (2/20)	学び (3/16)
大切 (6/12)	看護学校 (5/13)	聞く (4/13)	担当 (3/13)	大きい (5/11)
振り返る (5/11)	家族 (5/11)	しまう (3/12)	育児 (3/12)	きっかけ (4/11)

そして、NSとTRの各グループ「だけ」に見られる言葉を表6に示したが、前出の学生の研究キーワード（表1）に照らしながら見てもらいたい。学生が大学院でやりたいこととその関連ワードの多くが各グループに含まれていることがわかる。NSグループでは頻出語の多くは単独の使用者によるもので、TRグループでの頻出語は複数名による使用が多かった。NSグループの5名の看護師の専門領域がそれぞれ違ったこと、そしてTRグループの多くが学生に教える「看護」について記述していることがこの両グループの違いを示していると考えられる。

表6 NS、TRそれぞれの文章だけに見られる頻出語（カッコ内はNS/TRでの登場回数）

NS(回数)	使用者(回数)	TR(回数)	使用者(回数)
助産師 (34)	B(34)	講義 (13)	F(1)I(2)J(10)
訪問看護 (15)	D(15)	終末期看護 (11)	I(11)
分娩 (12)	B(12)	養成 (10)	G(1)H(9)
精神科 (11)	C(11)	治療 (10)	F(1)G(7)H(1)I(1)
セルフマネジメント (10)	E(10)	変える (8)	H(5)I(3)
利用 (10)	A(2)D(8)	不安 (7)	F(4)I(1)J(2)
人間関係 (9)	D(8)E(1)	考え (6)	G(4)H(1)I(1)J(1)
成熟 (7)	E(7)	障害 (6)	F(1)G(4)I(1)
不足 (7)	A(4)B(1)D(1)E(1)	臨地実習 (6)	F(1)G(1)I(4)
接遇 (6)	C(6)	発達 (6)	G(1)J(5)

*それぞれの頻出語の使用者A~Jと使用回数を示した



「看護」もしくは「看護師」を除いた組み合わせを斜体で示した
 図1 10名の文章で共起する言葉（カッコ内はNS/TRでの登場回数）

では、さらにNRグループとTRグループの文章の特徴を掘り下げるために、文中に共起する言葉を図1に示した。表3～表6の内容を踏まえてこの図を見ると、学生が共通して求めるもの、NSグループの5名が目指すものとTRグループが目指すものそれぞれの特徴が見て取れる。共通していることは看護教育がもっとできるようになることであり、NSグループがより目指しているのは看護キャリアの成熟であり、TRグループがより目指しているのは看護学生に向けた教育を考えることである。両者に共通していた言葉の多くが「看護」もしくは「看護師」を含む組み合わせであったのに対して、NSだけで共起していた言葉「キャリア・経験」「成熟・経験」「キャリア・成熟」、TRだけで共起していた言葉「教育・考える」「患者・関わる」「学生・考える」のように、看護や看護師以外の言葉での組み合わせがそれぞれのグループを特徴づけていると言える。

なおNSグループ5名の文章の中で、「看護」と共起する動詞の多くが「できる」^{1), 2), 4), 5)}、「感じる」^{1), 3)}、「考える」⁵⁾であったことは、このグループで見られる「看護キャリアの成熟」の追求に合致するものと言える。TRグループの文章では、「看護」と共起する動詞で目立つものは、「考える」⁶⁾⁻⁹⁾であり、続いて「できる」^{6), 8)}であった。さらにTRグループでは教える対象である「学生」が頻出しており、共起する動詞は「考える」⁶⁾⁻⁸⁾、「関わる」⁹⁾、「教える」¹⁰⁾、「楽しむ」¹⁰⁾であったことは、NSグループとの大きな違いと言えよう。

5. 看護師と看護教員の文章の比較から見えるもの

ここまで修了生と在学生10名の入学時の文章を取り上げてきた。①現在の立場、②入学までのライフヒストリー、③それまで各現場でやってきたこと、④これから大学院で取り組

みたいこと、この4点を盛り込んだ学生の「レポート」を、NSグループとTRグループに分けてテキストマイニングをベースに見てくると、両グループの共通点と相違点が明らかになった。「看護教育がもっとできるようになること」が共通していたことは、この看護教育研究コースのスコープを考えても非常に望ましいことであり、それは現在の学生たちの真面目な姿勢からも裏付けられる。NSグループの大きな目標が「看護キャリアの成熟」であり、TRグループの大きな目標が「看護学生に向けた教育を考えること」であることは、後続の新入生を見ても当てはまるように筆者は感じる。

上記の分析結果は、あくまで学生からのレポート分析の一つの形として提示したものである。文章の比較方法には様々な考え方に基づいたものがあるが、今回は看護教育研究コースの集団を職種という枠で二分しての比較とした（文章を完成して間もなくNSとTRの両方にまたがる形になった学生もいたが、文章完成時点での職種に基づいてグループ分けをした。）。分析の多くが定量的評価に偏重している点をご容赦いただきたい。また、紙面の都合により一部の解析結果の提示にとどまっているため、後続の結果は別の機会で示したい。

6. 教わる側のメリットと教える側のメリット

上記で取り上げたような文章を入学時に学生が書く最大の効用は、学生自身がこれまでの自分を振り返ることとこれから「研究」としてやりたいことを見つけるきっかけになることが同時に成立することにある。実際に、こういった文章を完成させるために幾度となく筆者とやり取りをしているうちにその学生の入学時の「インタビュー」が完結する。それを「形」にまとめることで学生は研究の動機付けが強まるだけでなく、その後の筆者との連絡が非常にスムーズになり、後続の修士論文執筆にもポジティブに作用しているようである。そしてこういった文章を完成させるべく筆者が働きかける最大の効用は、学生の特徴をハイライトできることであり、その後の指導やアドバイスがスムーズに行えることである。

7. おわりに

ベテラン看護師の老婆心をプレッシャーや非難としてしか受け止められなかった筆者の研修医時代はすでに十数年前のものとなった。それを振り返ると、看護教育研究コースで学生を指導していることに因果を感じることもある。臨床現場で看護師と話すメインは担当患者に関することであるのに対して、大学院では学生と話すほとんどが研究関連だという「ギャップ」が筆者には面白く感じられる。病院でどんな苦勞をしてきて、どういった疑問があるからこういう研究をしてみたい、というように学生と話をしながら研究テーマを見つけることは学生本人にも勤務先の病院にもプラスになることが多い。今の研究指導体制¹¹⁾では、多くの学生が集まってそれぞれの研究内容を共有することに重きを置いている。それは、同級生にとどまらず先輩後輩がどのようなことをしているかを把握しながら自分の研究を進める重要性をこれまでに筆者自身が実感してきたからである。

現在看護教育に携わっている人たちにとってつらいところの一つには、自分が教わったものと現在の教育内容が異なっていて、習っていないことをどう教えていいかわからないということが挙げられる。しかし、看護師は病院をはじめとした医療機関で、看護教員は看護師等学校養成所で、様々な人と関わりを持ちながら活動しているのである。特に看護師が病院での「バランス」になっていることは、筆者らによる看護師勤務調査でも明らかになっている¹²⁾。多職種連携の中心で活躍しているのである。そのコミュニティで生きている上で、さらに現場に還元できるような「研究」を大学院でチャレンジすること自体が、「看護教育を通してよりよい共生を目指す取り組み」と言えるのではないだろうか。そういった「場の提供」をするのが筆者の役目であり、本稿のテーマ「看護教育と共生」に対する一つの答えであると考えている。

上記のような学生の文章を完成するまでのやりとりが、その学生にとって文章を「直される」経験となり、モチベーション高く学生が取り組める研究テーマを指導教員が予測できることにつながると、筆者自身もこうして振り返ることであらためて確信している。学生の文章を用いたこのような比較は、同一個人の入学時と修了時、修了時のグループ比較など、様々な形に発展させていくことができる。さらには、各文章をオンラインで公開していることもあり、それを見つけて大学院へアクセスしてくる者も少なくない。今後もこのような学生の課題レポートを分析することで、学生の求めるものと得たものを明らかにしながら「皆で学ぶ場づくり」の工夫をしていきたい。そして、大学院での研究指導そのものが看護教育の向上を目指す人たちとの「共生の場」になるようにこれからも進めていきたいと考える。

参考文献

- 1) 横山絵美. 看護を学び続ける形としての通信教育. ハフィントンポスト. 2015.07.07. http://www.huffingtonpost.jp/emi-yokoyama/nurse_b_7741930.html (平成 29 年 8 月 31 日閲覧).
- 2) 泉愛子. 女性として、母として、助産師として学びへの挑戦. ハフィントンポスト. 2016.05.06. http://www.huffingtonpost.jp/aiko-izumi/midwife-challenging_b_9860818.html (平成 29 年 8 月 31 日閲覧).
- 3) 鵜飼由香里. 家族の支えで看護と学びの両立を目指す. MRIC. 2016.12.05. <http://medg.jp/mt/?p=7170> (平成 29 年 8 月 31 日閲覧).
- 4) 長谷川淳哉. 訪問看護に専心していくための学びの大切さ. MRIC. 2016.12.08. <http://medg.jp/mt/?p=7187> (平成 29 年 8 月 31 日閲覧).
- 5) 平尾衣利. 通信制大学院で学ぶ意味～看護師のセルフマネジメントの探求～. MRIC. 2016.12.16. <http://medg.jp/mt/?p=7206> (平成 29 年 8 月 31 日閲覧).
- 6) 栗原あゆみ. 看護・育児・介護を通して見える「学ぶ」意味. MRIC. 2016.06.14. <http://medg.jp/mt/?p=6785> (平成 29 年 8 月 31 日閲覧).

- 7) 原口梨那. 看護師の倫理教育を考えたい. MRIC. 2017.01.04. <http://medg.jp/mt/?p=7232> (平成 29 年 8 月 31 日閲覧).
- 8) 高橋深雪. 働きながら学ぶ意味～看護師として、看護教員として～. MRIC. 2016.08.03. <http://medg.jp/mt/?p=6912> (平成 29 年 8 月 31 日閲覧).
- 9) 小栗妙子. 看護教員としての成長－学生に伝えたいこととは－. MRIC. 2017.07.11. <http://medg.jp/mt/?p=7694> (平成 29 年 8 月 31 日閲覧).
- 10) 白井薫. 障がいのある子どもを育て、仕事をして、さらに大学院で学ぶことの意味～学ぶ喜びを看護学生に伝えたい～. MRIC. 2016.05.27. <http://medg.jp/mt/?p=6752> (平成 29 年 8 月 31 日閲覧).
- 11) 佐藤智彦. 看護専門職通信教育の 1 期生の卒業を迎えて. MRIC. 2017.03.22. <http://medg.jp/mt/?p=7426> (平成 29 年 8 月 31 日閲覧).
- 12) 佐藤智彦. 看護師勤務調査からニーズを探る重要性－福島県浜通り地域での取り組み－. ハフイントンポスト. 2017.04.27. http://www.huffingtonpost.jp/tomohiko-sato/hamadori-area-nurses_b_16277508.html (平成 29 年 8 月 31 日閲覧).